

研究論文

台湾アミ族の時間の観念(1)

—— 1 日の時の区分 ——

原 英 子

The Conception of Time among the 'Amis of Taiwan I :
How do the 'Amis divide a day?

Eiko Hara KUSABA

Some peoples in the world recognize the time by the position of the sun and/or stars in the sky. This paper aims to clarify the conception of the time before the use of clocks among the 'Amis who are one of the indigenous peoples in Taiwan. Especially we will take notice of how the 'Amis divide a day.

To begin I collected some facts which teach us about time before the use of clocks. During every moment of sunrise or sunset, some peoples are very sensitive to the varieties of light and darkness. Similarly we can see the 'Amis people are sensitive at sunrise. They show more interest at sunrise rather than at sunset, because they have few time words related to sunset time. These words show us the delicate difference of the changing lightness.

We can also see the same conception about the division of a day in the gods' and goddesses' world among the 'Amis. They have one god and some goddesses which show the different position of the sun during one day, according to the name of the god and goddesses. There are three goddesses named to show the progress of the time about sunrise. One name shows the position of the sun under the horizon, another name shows the position of the sun just at the horizon, and last one shows the sun just above the horizon. The other goddesses identify the position of the sun at noon and sunset. Only one god identifies the position of the sun under the earth, namely during the night.

These sun god and goddesses are deified by the shamans, called si-kawas-ay in 'Amis, who sometimes cure the persons of a disease.

Consequently, we find how the 'Amis people recognize the division of a day. They are very careful with the varieties of the lightness at sun rise, therefore the cosmology of the 'Amis is also reflected in this conception of the day's division.

はじめに

台湾東海岸部に住んでいる先住民族のひとつにアミ族といわれる人々がいる。戦前、高砂族とよばれた民族のひとつで、日本が台湾を植民地としていたころ（1895年～1945年）から日本との関わりが深い人々である。

アミ族の人々に、アミ語で「何時ですか。」と聞くと、次のように言う。「Pina ko toki ?」 「3 時です。」と

いう答えは “Tolo ko toki .” である (Pourrias & Poinot 1996 : 337 方1986 : 342)。あるいは、「1日は24時間である。」は、“Tosa apolo' ira ko spat ko ta-toki-an⁽¹⁾ no ccay a romi'ad. ” となる (林生安・陳約翰 1995 : 294)。これらの文章中の下線は、筆者が引いた。下線に注目するとわかるように、アミ語で時刻や時間は ‘toki’ という。「何時」「3 時」「何時間」の「時」で、日本語からの導入である。それでは時計が導入され

る前、人々は1日の「時」をどのように認識していたのであろうか⁽²⁾。これが本稿のテーマである。

アミ族の集落にはシカワサイsi-kawas-ayとよばれる宗教的職能者たちがいる。その宗教儀礼には、アミ族の時間の観念を知るための資料が含まれている。本稿ではこれらの資料を検討していきたい。まずは、シカワサイの儀礼を考察する前に、シカワサイについて簡単に紹介しておこう。

アミ族の部落にはかつてどの部落にもシカワサイがいた。シカワサイは種々の宗教儀礼をおこなう。アミ族の人々にとっては、村の宗教的職能者として、あるいは病気を治療する呪医としてなくてはならない存在だったが、そうしたシカワサイたちの役割も現在では宗教面ではキリスト教会に、また病気治療という面では病院にとってかわられた部分がある。しかし病院に行っても病気が治らないとき、あるいは祖先たちとのつながりがどうしてもほしいときなど、今でもシカワサイを訪ねて儀礼をおこなってもらう人々がいる。ただし、どの地域のシカワサイかで異なる伝承や儀礼もみられる。筆者は1990年代から、花蓮市近郊でシカワサイを中心とした調査をおこなっている。そこで本稿で、シカワサイの資料を提示する場合、特にことわらない限りはこの地域の調査から得た資料を指すことにする。

シカワサイは、多いところで15人ほどのメンバーから構成される組織であった。彼らはカワスkawasと呼ばれる超自然的存在、すなわち霊的なものや神々、化物などと会話などで交流することができる能力をもつとされている。シカワサイsi-kawas-ayとは、アミ語でカワスkawasをもつ(si-)人(-ay)という意味がある。その名は彼らのその特殊な能力を表した名称なのである。

シカワサイたちは、カワスと交流する能力の高さによって組織内での序列がきまっている。もっとも力のある者がリーダーである。リーダーの次には、組織でアイシダン'Aisidanと呼ばれる幹部クラスのシカワサイたちがいる。彼らは実に多くのカワスの名前をその存在するとされる場所とともに知っている。つまり、アミ族の神々についてよく知っているし、村で亡くなった祖先たちを、幾代にもわたって、しかもその親族関係についてもよく知っている。また村にときどき現れる妖怪についても詳しい。

シカワサイたちが祭祀する神々のなかに、太陽神チダルCidalがいる。チダルとは、太陽を意味する日常のアミ語である。私たち日本人が考える太陽はひとつだが、シカワサイが祭祀するチダル神はひとりではない。太陽は1日の中でさまざまに変化する。明け方の太陽、昼間の太陽、黄昏の太陽。そうしたさまざまな様態の太陽が、

それぞれ別の神格をもって認められているのである。

アミ族の人々はどうしてこのように多くのチダル神を認めているのであろうか。筆者はチダル神には、アミ族の人々が認める時間の観念が含まれていると考えている。それは、日本統治時代以前、つまり時計で計測する時間の観念が導入される以前の、アミ族の時間の観念を表していると考ええる。

1 太陽の移動によって時を知る方法

太陽の移動は時間の認知にどのようにかわっていたのだろうか。台湾アミ族について検討する前に、アミ族以外の民族での時間の認知についてみておきたい。

戦前、台北帝国大学で教鞭をとっていた移川子之蔵は、1936年に「未開社会における時の観念」という論文を書いている。このなかで、世界各地の民族が時を知る方法には以下のような方法があると整理している。

(イ) 太陽の位置によって時刻、時間を知る方法 (ロ) 太陽によってつくられた影を読むことで時刻を観察する方法 (ハ) もともとは天体の観察から時刻を知ったのではないかとおもわれるが、時刻を、1日の日常生活や仕事を表す言葉を取り混ぜながら表現する方法があるという。たとえば、雲南の猓々族(Lolo)は、鶏鳴の時刻、夜明け前、朝、朝餉時刻、牛を連出す時刻、昼餉時、日中、燈をとす頃、日没ごろ、夕餉ごろ等々という(移川 1936:5)。天体を離れた方法として、海の潮の満ち干によって知る方法や、釜の水が沸く時間をひとつの時間の単位とし、1日の区分をおこなう方法などがあることも紹介している。(移川 1936:3-6)

移川が指摘する(イ)の太陽によって時刻、時間を知る方法では、エヴァンス＝プリチャードによるアフリカのヌアー族の事例などが思い起こされる。それによるとヌアー族は出来事の時間を示すのに太陽の天空の位置を指し示すという。また太陽の位置を示す表現には曙の光、日の出、正午、日没などの特徴的な位置に関するものであるが、特に1日の活動が始まる午前4時から6時かけての大地と太陽の織りなす変化に関する表現が際立って多いという。(エヴァンス＝プリチャード 1978:161-162)あるいはモーリス・レーナルトによると、メラネシアのカナク人は、朝夕のまん丸い太陽と、ぎらぎら輝く太陽、日の光が明るい状態の太陽では言葉がそれぞれ違い、1日のうちでみられる太陽の変化に敏感であるという(レーナルト 1990:131)。

台湾先住民族のひとつにセデック⁽³⁾といわれる人々がいる。アミ族の北西部から西部にかけての隣接した地域に住んでいるため、両者の間にはしばしば誼首もあり、敵対関係にあったようである。現在でも高齢者のなかに

はそうした伝承を記憶する者もいるが、現在の若年層は気にせず通婚などもみられる。居住地は、アミ族は、台湾の東海岸一帯の平地を主な居住地としているが、セデックは、もともと台湾中部山岳地帯に住んでいた。そこから移住してアミ族の北西部山岳地帯に移り住んだグループもある。また日本の植民地時代には、花蓮の北西部から西部にかけての山麓地帯に移住させられている。

こうしたセデックの時間の認識について、前掲の移川論文に記述がみられる。セデックは、海岸線沿いに住んでいるアミ族と違い、上記のようにもともと山岳地域に住んでいた人々であるが、セデックでも太陽の位置で1日の時間を認識していたのがみられる(移川 1936: 3-4)

表1をみるとセデックでは、朝は、日が昇るまでの短時間に起こる明るさの変化を2段階に分けて認めているのがわかる。その後は日の出、日がのぼって少したった時間帯、昼前、正午と別の単語で区別している。正午、すなわち太陽が1日のなかでもっとも高い位置まできたあとは、太陽は傾き始める。やや傾きが認められる2時～3時ごろと太陽が山の頂上にさしかかる夕方近くをそれぞれひとつの時として認めている。その後は日没と日没後の薄暮を区別して認識している。この他移川は正午の正反対の時間として真夜中tsikau rabeが認知されていると指摘している。移川が採集した以外の時を現す言葉としては、現在、小学校で教えられているセデック語の教科書『賽徳克語』に、夜kemanという語が記されているのを見ることができる(教育部編 1998: 17)。

以上みてきたヌア一族やカナク人、セデックの事例か

表1 セデック語による1日の分担

セデック語	太陽の位置	日本語
simmef	太陽が地平線下にあり東方明るみを呈するころ	暁
rumeidaf		曙
tsumeb	太陽が地平線上をでるとき	日の出
side	朝9時ごろ	
muterf	朝11時ごろ	
tsikan-ar	太陽が中天に達した正午	日中
simehelus	午後2、3時ごろ	斜陽
babao degira babacan hari	午後4、5時ごろ	山の頂上 夕方近し
mureq hëdao		日の入
siressa	太陽は地平線下だがなお夕陽がのこるとき	薄暮
keman		夜
tsikau rabe	日中と正反対の時刻	真夜中

(移川 1936pp.3～4、教育部編 1998: 17より作成)

ら太陽の位置の表現をみても、1日は決して現在の時計的時間のように均等に分割されて認識されているわけではないことがわかる。人々はその生業との関わりの中で、1日のうちでも地平線と交わる日の出や日没の明るさの変化をとて敏感に認知して、区別しているのがみられる。ただしそれは仕事等との関係から日の出の明るさの変化に特に敏感である場合もあるし、夕方に敏感である場合もみられるようである。日の出、日の入以外には、太陽が1日のうちでもっとも高い正午が、共通して特別な区切りを示す時として認識されているのがみられる。

2 台湾アミ族にみる1日の時の表現

台湾では、1990年代後半ごろより、小学校などで母語を学習する教材が盛んに書かれるようになった。アミ語も例外ではない。そうした教科書のひとつに『阿美語初級読本』がある。これにアミ語の1日の時間の分類名称があげられている(陳1997: 72)。この『阿美語初級読本』を基本に、小川尚義の『アミ語集』(1933)、方敏英『阿美語辞典』(1986)、林生安・陳約翰編著『阿美語図解実用字典』(1995)、Louis Pourrias & Maurice Poinsoat “Dictionnaire ‘Amis Français” (1996)を参考に、表2をつくってみた。

表2で示したアミ語による1日の分割名称をみてもらいたい。まず太陽が地上に姿を現す前の黎明monihar、あるいは方言によってはsoniharという時間帯が意識されている(方1986: 195 Pourrias & Poinsoat 1996: 199)。その後日の出ma-dafak ko cidal⁽⁴⁾(小川 1933: 311)となり、太陽が地上に姿を現したあと、早朝dafakになる(方1986: 76)。それから、午前'ayaw no lahok、正午lahokとなり、午後hrek no lahokとなる。'ayaw

表2 アミ語による1日の分割名称

日本語	アミ語
黎明	monihar/ sonihar
朝	dafak
午前	'ayaw no lahok
正午	ka-lahok-an
午後	hrek no lahok
夕刻	dadaya
夜	lafii
真夜中	tonok no lafii

(陳1997、方1986、Pourrias & Poinsoat 1996、小川 1933より作成)

no lahocの文字通りの意味は、正午lahokの前という意味である。またhrek no lahocとは、正午が終わってという意味である。

太陽が沈む時間帯は、日没がmurasot ko cidal⁽⁵⁾ (小川 1933:311)、夕べ、夕刻、黄昏時、晩を示すdadaya (小川 1933:388,389 方1986:75 林生安・陳約翰 1995:49)、その後lafii⁽⁶⁾となる。lafiiとは夜も深まった時間帯を含んでおり、夜分とか真夜中、深夜という訳もあてられている (小川1933:385、林・陳約翰 1995:145)。しかし特に真夜中を指す語にtonok⁽⁷⁾ no lafiiという言葉もみられる (小川1933:396)。

以上まとめてみると、アミ語でも、先にみてきた事例同様、①日の出前の太陽、つまりまだ姿を現さずに明るさがみられる黎明という時間帯や②日の出、そして③太陽がのぼって少したった時間帯を表現する言葉が存在するのがみられ、日の出の刻々とした明るさの変化が細かく区別されているのがみられる。一方日没の方は夜と日中を区別する時として、太陽が地平線下に沈んでもまだ明るさが残る黄昏が特別な区切りとして認識されているが、日の出のような細かな区別はみられない。また、他の民族事例にも共通してみられたように、1日のうちで太陽が最も高い位置にくる正午が、ひとつの区切りとして認識されているのがわかった。

3 太陽の神々とシカワサイの祭祀

(1) シカワサイが祭祀するチダル神

シカワサイたちは、太陽の神、チダル神を祭祀する。これらは〇〇チダルという名前で見られている。シカワサイたち祭祀するチダル神はひとりではない。太陽のさまざまな状態を表す次のようなチダル神たちがいると考えられている。以下にそのチダル神を紹介するが、便宜的に番号をつけている⁽⁸⁾。

①アナボヤイ・チダル (Anavoyay Cidal) : これは海より下にいる状態の太陽⁽⁹⁾だという。この時間帯はまだ暗いので人々がはって歩くような状態の太陽の神である。先にみたアミ語の対応を考えるとlafiiの状態の太陽である。

②ハララヨ・チダル (Halalayo Cidal) : 水平線の近くにまできた太陽だという。つまり黎明の太陽を指している。いわばmonihar/soniharの太陽神。

③カムサダカン・ノ・チダル (Kamsadakan no Cidal) : 日の出の太陽だという (林桂枝1995:110)。

④ブタカヨ・チダル (Votakayo Cidal) : 水平線から離れた状態の太陽だという。1日のうちで日がのぼった朝早い時間帯の太陽神だと考えられる。

⑤のラムカイ・チダル (Lamkai Cidal) が、砂を熱くす

る太陽だという (林桂枝1995:110)。これは1日で考えると正午前後の太陽のことだと思われる。

⑥ラルボガン・ノ・チダル (Lalevogan no Cidal) : 日没の太陽だという (林桂枝1995:110)。つまり黄昏dadayaの太陽である。

⑥の黄昏dadayaが過ぎ去り、暗くなると①の地平線下の太陽であるアナボヤイ・チダルとなり、②ハララヨ・チダルの黎明となって再び③④⑤と繰り返される。

シカワサイが儀礼で呼ぶこうしたチダル神をみると、1日のうちでも日の出前後の太陽の状態にもっとも注意しているのがわかる。すなわちまだ暗い状態から、水平線に近くなりやや明るくなった状態、日の出の時、そして水平線から離れた状態の太陽とその刻々とした明るさの変化が認識され、それぞれの時に神の名称がつけられている。日の出に対し、日没時は日没の太陽だけがラルボガン・ノ・チダルとして名称をもっている。つまり、チダル神の名称をみると、アミ語の1日の分割同様、日の出前後の短期間におこる刻々とした明るさの変化をもっとも敏感に区別しているのがみられるのである。

この他、夜は太陽が地面の下をはっている状態だと表現されているのがみられる。つまり夜を月と結びつけるのではなく、太陽は見えないが、それは地面の底を太陽がはっているからだと考えているのである。現在の花蓮近郊のシカワサイ儀礼には、月bladの神は出てこない。シカワサイは、太陽と関係が深いと考えられているのである。

(2) 夜の太陽は男性

前節にみてきたアミ族のシカワサイが祭祀するチダル神たちは、地面の下にある太陽、すなわち夜の太陽と、地上に明るさをもたらす太陽は、まったく同様に考えられているのではない。

アミ族の神々は、すべて男性か女性かの性をもつと考えられている。チダル神も例外ではない。ただし複数いるチダル神のなかで、①のアナボヤイ・チダルだけが男性で他は女性だと考えられている。つまり私たちの暮らす世界まで太陽の光がとどかない夜の太陽は男性であり、太陽の光を感じることができる太陽は女性と認められているのである。

アミ族では、一般に太陽は女性で、月は男性だと考えられている。以前、男性は夜這いをして、女性のもとに通っていたので、それを見守る月は男性なのだと解釈している者もいる。また、太陽は女性が洗濯物を乾かしてくれるので、女性だともいう (馬淵 1974:299)。馬淵東一は、バタアン (馬太鞍) 社の口碑として次のような話を収録している。

満月の後、男性なる月は次第に虧けて遂に見えなくなる。それは女性なる太陽を待つて隠れてゐるので、そのとき日月が一緒に寝るのである。(馬淵 1974: 299)

バタアン社でも、月や地面の下を這う太陽など、夜と関連のある月や太陽は男性と認められているのがみられる。

この他にも、地下を男性、天空を女性とする考えがシカワサイ儀礼のなかに認められる。すなわち、アミ族のシカワサイたちは、地下を支配する神マラルノ Malalono と天空を支配する神マカ・コドール Maka-kodol⁽¹⁰⁾がいると考えている。そして地下の底深いところにいるマラルノは男神で、天空の最も高いところに存在するマカ・コドールは女神だという。マラルノは地下の深いところにいるが、生前シカワサイをしていた男性のなかでも、霊力が強かった者の魂は、死後、マラルノの元にくとされている。一方、マカ・コドールを祭祀するシカワサイは女性に限られている。このように地下を男性と、天空を女性と結びつけているのである。

これらの資料で指摘してきたように、夜や地下は男性と、昼や天空は女性と考えられている。そうした思考は1日の太陽をつかさどるチダル神の性にも反映されているのが認められる。

(3) 太陽光を反射して輝く鏡の神マダディゴ

シカワサイたちは、マダディゴ Ma-dadigo という神を祭祀する。これも太陽と関係のある神である。ダディゴ dadigo とはアミ語で鏡のことである。それに接頭辞の 'ma-' がついて、鏡のような神という意味がある。神名がその特徴を表している様に、太陽の横にいて、太陽の光を反射して、自分自身もまるで太陽のように光ってみえる神だという。

太陽の横というのは、シカワサイたちは、神々を方位と関連づけて祭祀していることに関係している。チダル神は北東方向に存在すると考えられているが、マダディゴは、その隣の真東に存在するとされているのである。マダディゴを祭祀する場所は、反射による太陽の光の帯がとどく場所なので、祭祀するとき、裸足の足がとても熱く感じられる場所だという。花蓮周辺に住むアミ族は、東を女性の方位とみなしているのであるが、そうしたところから真東にいるマダディゴ神を祭祀するシカワサイは女性に限られている。

マダディゴは、太陽の輝きを反射しているが自分自身は実は太陽ではない。そこから嘘つきの神だともいわれている。

4 バタアン社の神々の系譜にみる太陽

(1) バタアン社の太陽神

これまでシカワサイたちが、複数のチダル神や擬似的太陽の神マダディゴを祭祀していることをみてきた。これらから、シカワサイたちは太陽を祭祀するとき、ひとつの太陽神が1日のなかでさまざまな姿を変えるのではなく、1日のそれぞれの太陽の状態を示す太陽神がいると考えていることが特徴としてみられる。これは花蓮周辺のアミ族だけではなく、他の地域のアミ族でもみられる。花蓮市南方にあるバタアン社に伝承されていた神々の系譜から、太陽に関する神々を取り出して以下に示す。ここにも、アミ族が太陽のさまざまな状態の変化に、とても敏感であったことが示されている。

バタアン社はアミ族の大きな集落である⁽¹¹⁾。馬淵東一は1930年代にここを調査し、「パングツァハ族の神々」(『宗教研究』11-4、1934年)と「パングツァハ族の神々(続)」(『宗教研究』12-1、1935年)を著している。そこには以下の神話が収録されている。

太古、何処か日没の方向に女神 Mariap と男神 Kadonkun あり、その子は Ma-adingo および Tsi-arayan と云ふ。この時代には天低く、日月未だあらはれず、すべてが闇に蔽はれてゐた。やがて、天を押し上げる相談があり、色々の動物がそれを試みたが失敗に終わる。…(中略)…最後に鳥秋(tata'tsih)と云ふ鳥が tsi-tsi と囀りながら、どうしたてやつたものか、遂に天を押し上げた。この時、日(tsidar)と月(vorad)一系譜第三代一とが生まれ、また、星、雷、風、雨などもあらはれた。かくして天地が明るくなり、昼夜の別を生じ、ついで、人間をこしらへる神、狩猟及び漁撈の神、穀物の神、戦争の神などが順次生れる。その外、祭祀の方法や頭目及び呪医の仕事を教へた神々もある。

(馬淵 1974: 286)⁽¹²⁾

馬淵の本文中の説明によると、第一代の神 Mariap は鍛冶屋の神(女性)と雷鳴(votire')の音の神 Kadonkun (男性)によって、第二代 Ma-adigo (女性)と Tsi-arayan (男性)が生まれる。Ma-adigo は人間の魂 adigo を守る神と考えられている。arayan は天、空を意味する。Tsi-arayan は鳥秋によって天が押し上げられたとき、天とともに上に昇り、おりてこなかったという。この Ma-adigo と Tsi-arayan の子どもが第三代 Anavoyau⁽¹³⁾ という太陽(女性)と Noayarau という月(男性)である。太陽 Anavoyau と月 Noayarau との間に、第四代 De'sir (女性)と Tsih-tsih (男性)が生まれる。De'sir は、曙の光が輝く様であり、Tsih-tsih は真昼の烈しい光の形容で

ある。いずれも第三代の母なる太陽の子であるという。第四代頃から神々は天から下りてきたという（馬淵1974：286）。De'sirとTsih-tsihの子は、アミ族の慣習にならって祖父母の名前をとり、第五代Anavoyau（女性）とNoayarau（男性）と名づけられた。第六代は魂の神、人間を作る神Dongeと人間が生まれるとき男か女かを知らせるふくろうKong、それに狩猟と漁撈の神Kavedが生まれたとされる。（馬淵1974：287-288）

馬淵が採録した神話から、天が押し上げられたとき太陽と月が生まれたこと、そこから曙の光が輝く状態の神と真昼の烈しい光の神が太陽の子として生まれたことがわかった。そうした太陽の光の様を表す神々の子には、太陽の神とAnavoyauと月の神Noayarauの名が再び繰り返されてつけられている。祖父母の名を孫につける慣習は確かにアミ族の間に見られるが、この慣習により繰り返される名は、バタアン社の神々の系譜には太陽の神とAnavoyauと月の神Noayarauの名だけにみられる。第三代の太陽と月は天地が分かれるときに生まれた神々である。第四代の神々De'sirとTsih-tsihは、曙の太陽と真昼の烈しい太陽を示している。つまり太陽の子は、朝と昼の太陽の状態を表している。これより1日の太陽のなかでも、朝から昼にかけての太陽が夕方より注目されているのがわかる。これはアミ語においては、1日のなかでも、日の出の時刻前後の明るさの変化を特に敏感に感じ取り、細かく区分していることとの関係がうかがわれる。

第四代のDe'sirとTsih-tsihは天から下り、第五代で再び太陽と月が登場、第六代で人間をつくる神や生業の神が生まれてくる。第四代には、太陽の子としてのさまざまな状態の太陽が、第六代には太陽の子として人間をつくる神が生まれたことが表現されている。第三代と第五代の太陽は、ひとつは太陽の状態を示す神々が生まれたこと、もうひとつは人間と太陽が密接な関係をもつことを示している。細分化された状態の太陽の親としての太陽（第三代）と、人間の創造神や人間の生業神など人間と深いかわりをもつ神々の親としての太陽（第五代）と、太陽の神Anavoyauは、その名を二度登場させている。

(2) バタアン社のチダル神とシカワサイ

花蓮のシカワサイたちは〇〇チダルという名で表される複数のチダル神を祭祀していることを先にみてきた。バタアン社でも太陽を意味するアミ語チダルという名で示されるチダル神（＝太陽神）がおり、これらはすべてシカワサイと関係する神々と考えられている（馬淵 1974：290）。

最初のチダル神は第九代に登場する。Raritsayan-no

-tsidarという名である⁽¹⁴⁾。太陽がこの神に話をして呪医の仕事を教えたという。これが最初の呪医シカワサイになったのだという。その他第九代にはPareh-no-tsidar やKakatsawan-no-tsidarがいる。いずれもチダル神である。Pareh-no-tsidar のparehとはバナナの葉を振る動作mi-parehからきている。シカワサイが病気を治療するときにバナナの葉を振って呪をおこなうところからきている。Kakatsawan-no-tsidarは人間の行為をみて、悪人に罰として病気をさせる神で、やはり呪医であるシカワサイと関係している神だという。この他、第九代、第十代にはチダルで表される神々がいるが、シカワサイの呪術行為などが神名となっている（馬淵 1934：290-291、294）

バタアン社ではシカワサイの仕事は太陽によって教えられたものとされ、シカワサイが病気治療をするさまざまな行為は太陽を意味するチダルという名称がつけられている。病気平癒の祈祷は太陽に向かってなされ、供物がささげられるという。また隣のタバロン社ではシカワサイだけでなく、一般の祭祀も太陽から教えられたと伝えられているという。（馬淵 1934：299）花蓮近郊のシカワサイも病気治療につかうバナナの葉は東の太陽に向かって伸びている葉を使うこと、太陽に関する神々の分類が他の神々と比べて多いことなどから花蓮をはじめ、バタアン社、タバロン社など、アミ族では太陽がシカワサイや祭祀と密接に関連づけられて考えられていることがみられる。

まとめ

以上、アミ族の時間の観念のなかでも、時計の導入がなされるまえの1日の時の区分について考えてきた。現在のアミ語で、時間を表す言葉は、日本語の時‘toki’が使用されることが多いが、この‘toki’がアミ族の人々に一般化する以前、太陽の位置は、人々に時を知らせる重要な役割をしていたと考えられる。

筆者は太陽の位置と時を示す言葉は、1日の分割認識と深く関わっていると考え、これについて考察してきた。その結果わかったことは、アミ語においては、1日のなかでも、日の出の時刻前後の明るさの変化を特に敏感に感じ取り、細かく区分していることである。

アミ族のなかで、アミ族の神々を祭祀し、病気などを治療するシカワサイとよばれる宗教的職能者たちがいる。太陽から病気治療をおそわったという伝承など、シカワサイは特に太陽とかかわりが深いと考え、〇〇チダルで表される太陽神を祭祀する。そのシカワサイたちが祭祀する太陽の神々をみると、アミ語で日の出前後の分類が多いのと同様、日の出前後の太陽の状態を示す

神々が、多いことがわかった。またシカワサイたちは夜を、地面を這う太陽の時間帯ととらえられており、1日を昼と夜や太陽と月といった分類ではなく、すべて太陽を基準に区分していることがわかった。

アミ族の集落に行くと、太陽が出る前(黎明monihar)から畑仕事にでかけたり、川で洗濯したりする人々を見かける。そして本格的に暑さが増す前(早朝dafak)に一仕事終わり、太陽がもっとも高い位置にくる正午ka-lahok-an前後は、家の中や日陰で昼寝をする。アミ語にみる1日の太陽の動きを表す言葉は、まさにその活動パターンとかかわっているのである。

現在の時計は、1日を24時間に分割し、それぞれ朝でも昼でも夜でも1時間という時間の長さは同じで、1日は均一な単位で区分される。しかし時計が一般化する以前の生活は、1日は、均一に分割されて認識されていなかったのではないと思われる。

そうした1日の分割認識は、アミ族の神々の世界にも象徴的にあらわれている。アミ族の人々は、人間の誕生も太陽と関係すると考えた。太陽は1日のうちでさまざまに変化する状態があるが、そうした状態の太陽の親であり、また人間の創造神や生業の神の親でもある。呪医シカワサイの仕事も太陽によって教えられ、病気治療ができるようになった。人々の暮らしはまさに太陽の恵みにより成り立っていることがバタアン社の神話の中に読み取れた。

このように、日々の生活と密接に関わる太陽を表現する言葉や神話の中に、アミの人々の、1日の時間の観念を含んだ世界観が表象されている。そこでは、1日=24時間という時計で計測する時間とは異なる時が流れている。

【注】

- (1) ‘toki’ という単語がわかりやすいように接頭辞と接尾辞を分けて表記した。
- (2) 時を表わす言葉は、日本語から導入された tokiのほか、widi、idi’ がみられる(小川1933:150、ただし小川が表記に使用した特別な記号は、方 1986の表記を参考に筆者が書きかえた)。つまりtokiのかわりに“Pina ko widi?” “Tolo ko widi”という言い方も可能である(Pourrias & Poinso 1996:337,348 方1986:354)。widi、idi’は日本語の「時」以前の言葉として注目される。
- (3) セデックSeejiqについて、移川は、「高砂族アタヤルの一部」(移川 1936:3)としている。アタヤルAtayalは、現在、人類学ではタイヤル(台湾では泰雅)と表記することが多い。1990年代後半からはじまった

セデックの人々によるタイヤルからの分離独立要求運動は、2003年に半ば分離が承認されるような状態を呈しているが、2003年10月の現段階ではセデックの表記について、セデック族とするには多くの問題を含んでいるので、ここではセデックとのみ表記した。詳しくは原(2003:209-227)。

- (4) 表記については、方(1986)を参考に変更するとma-davakであるが、他と表記をあわせるため mada-fakと‘v’を‘f’とした。
- (5) 表記については、方(1986)を参考に変更した。
- (6) 陳はlafii’と表記している(1997:72)が、ここでは方(1986:160)とLouis Pourrias & Maurice Poinso 1996(1996:152)の表記によった。
- (7) 時間的中央という意味(Pourrias & Poinso 1996:340)。小川の表記はPourrias & Poinso 1996にしたがって変更した。
- (8) このほかオトトイ・チダル(Ototoy Cidal)というチダル神がいる。私たちは太陽の子どもという意味あるというが、1日の分割のどこに入るか不明なのでここでは除外した。
- (9) この話をしてくれたシカワサイの集落は、台湾の東海岸沿いにあり、太陽が出る方向は海である。
- (10) アミ語でコドールkodolとは「上」のことで、接頭辞マカ‘maka-’がついて最も上という意味になる。天空の最上部に位置する女神である。
- (11) 馬淵の調査当時、人口2,400人ほどの大きな集落であったという。(馬淵 1974:285)
- (12) 馬淵の表記中特殊な記号は、方(1986)を参照して変換している。
- (13) Anavoyauとは、まだたつことができない赤坊が、手足で這い回る状態を意味する言葉で、太陽の歩き方がこのようであるところから名づけられたという。(馬淵1974:288)
- (14) raritsayanとは出会って話をするという意味がある(馬淵 1974:290)。tsidarは筆者の表記ではcidalであるが、ここでは馬淵の表記にしたがった。

【参考文献】

- 移川子之蔵 1936「未開社会の時の概念」『民族学研究』2-4
- エヴァンス＝プリチャード 1978『ヌア族—ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録』向井元子訳 岩波書店(E.E.Evans-Pritchard 1940 “The Nuer”, Clarendon Press, Oxford)
- 小川尚義 1933『アミ語集』台湾總督府
- 原 英子 2003 「タイヤル・セデック・タロコをめぐる

- る帰属と名称に関する運動の展開(1)―タロコにおける動向を中心に―『台湾原住民研究』7号 風響社
- 馬淵東一 1974「パンゲツァハ族の神々」(1934『宗教研究』11-4初収 のち『馬淵東一著作集』3 社会思想社1974)
- 1974「パンゲツァハ族の神々(続)」(1935『宗教研究』12-1 初収 のち『馬淵東一著作集』3 社会思想社1974)
- モーリス・レーナルト 1990『ド・カモ』坂井信三訳 せりか書房 (Maurice Leenhardt 1947 “Do Kamo: la personne et le mythe dans le monde mélanésien”, Edition Gallimard)
- 方敏英 1986『阿美語辞典』財団法人中華民国聖經公会
- 林生安・陳約翰編著 1995『阿美語図解実用字典』台北 県政府出版
- 林桂枝 1995『花蓮県阿美族里漏社の祭儀音楽——Mirecuk田野調査研究』国立台湾師範大学 音楽研究所碩士論文
- 教育部編 1998 国民小学郷土語言教材『賽德克語』第二冊 (四年級) 試用本
- Louis Pourrias & Maurice Poinso 1996 “Dictionnaire 'Amis Français” (unpublished)

【謝辞】

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(2)(平成13年度、14年度、15年度 課題番号13610370)による台湾調査で得た資料の一部を使用している。調査に際しては、台湾中央研究院民族学研究所や現地の方々、とりわけアミ族のシカワサイの方々やセデックの方々に
お世話になった。この場を借りてお礼申し上げます。